

保育における環境構成技術の構造的な把握による理論化の試み

The Structural Theory of Techniques in the Childcare Environment Configuration

高山静子*

1. 研究の目的と背景

「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」には環境を通した保育の重要性が示されている。保育者が行う「環境構成」について、「幼稚園教育要領」には、「幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとのかかわりが重要であることをふまえ、物的・空間的環境を構成しなければならない」とある。「幼稚園教育要領解説書」には、「教師の担う役割」として、一人一人の幼児に対する理解に基づき、環境を計画的に構成することが挙げられ、「保育所保育指針解説書」には、保育士の専門性の一つとして「保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術」が示されている。

また平成22年度の保育士養成課程の改訂では、獲得目標に「保育の環境構成の技術の習得」が挙げられている⁽¹⁾。

しかし環境構成の理論的な原則は必ずしも明らかではない。保育者の養成に用いるテキストには環境を構成する必要性と具体的な事例は示されているが、事例に通底する理論は示されていない。これまで保育実践から今井(1998)、吉本(2002、2003)は子どもの発達に即した環境を示し、埋橋(2004、2008)はアメリカの保育環境スケールの翻訳普及を図っている。その他様々な個人や団体により保育環境の具体的な提案が行われてきた。また環境構成の研究として季節毎に園内の植物や動物、虫などの自然環境の実態を調査した研究(藤井、高月2003)や子どもと環境構成の関係を調査した研究(榎1998、塩見・立石2002他)等、環境構成の具体例に関する研究はあるが理論を構築する研究は見られない。

保育所・幼稚園では保育者がもつ環境構成の技術を言語化する取り組みは少しずつ進んでいるものの、環境構成技術は一部の園の実践知に留まり、保育における環境の構成は、保育者が技術として共有するには理論化が不足している段階といえる。その結果、多くの幼稚園・保育所の保育室には、保育雑誌をそのまま模倣した壁面飾りやテレビ文化の氾濫があり、遊びを中心とする幼児教育において、教科学習を中心とする小中学校の教室や体育館、運動場と同様の環境が整備されている園も少なくない。

環境構成の技術とは、具体的にどのような技術を指すのであろうか。その技術の下位と

* 浜松学院大学(保育 子育て支援)

なる知識には何があるのか。本研究は、環境構成技術を体系的に教授し養成するために環境構成技術の構造的な把握を試み、理論の構築を図るものである。

環境構成の原則が明らかとなれば、保育者は根拠に基づいて環境を構成することができる。本研究で構築しようとする原則は、実践の骨組みとなるものであり、保育者が実践の理論的な骨組みを持つことにより、地域と子どもの多様性に即した柔軟な展開を助けることを意図している。

2. 研究の方法

はじめに 2009 年度に実施した「保育所における教育的機能に関わる実証的考察とその活用に関する研究」と、2010 年度に実施した「保育所における養護技術の抽出と活用に関する研究」において高山が担当した保育者の技術抽出に関する研究成果から、それぞれ遊びと生活場面における環境構成技術の抽出方法と結果について概説する⁽²⁾。次に二つの研究成果の再構成を行い、環境構成技術の構造の把握を行う。その結果に基づいて環境構成の定義・展開プロセス・要素を考察し、環境構成技術の原理の試案を提案する。

次に、これらの妥当性を高めるために 2011 年度に環境構成技術の獲得を教育目標とした試行的な研修を実施する。事前に調査研究を目的とすることを説明して研修を実施し、終了後アンケートの記述を依頼する。保育者が記述した内容を質的データとし、文脈を重視し分節化せずにセグメントを作成する。記述内容を学習成果の視点から抽出し内容の類似性に基づいて類型化を行い、抽出した学習成果からその学習階層を検討する。次に、先行研究を基に環境構成技術の学習課題分析を行い、学習階層図を作成する。学習階層図は学習課題への前提スキルとその関係を示す図である。(ガニェら、2007) また手続き型の課題分析を行い、それらの結果を記述内容に基づく学習階層図と比較し結果を考察する。これらを総合して、保育者が根拠に基づいて環境構成を行うために前提となる知識と技術を明らかにする。

保育者は、環境構成の技術を、子どもの保育と保護者の保育指導に対して用いているが⁽³⁾、本研究の範囲は保育所における乳幼児の保育で用いる環境構成に限定する。なお本稿における保育者は、保育所・幼稚園において子どもの保育に携わる者を指す。3年間の研究対象は保育所であったが、調査対象となった保育者には幼稚園教諭経験を持つ者が多く含まれており幼稚園教諭と保育士を合わせて保育者とする。また保育者には園長を含んでいる。

3. 研究の結果

(1) 遊びと生活の場面の分析から得た環境構成技術

遊びの場面における研究方法は、保育者を対象とした3回のグループ・インタビューから得たデータの分析と8園のヒアリングと観察による。ヒアリングでは保育者はねらいを

持ち保育室に置く物を選択し環境を構成していることが明らかとなった。環境構成行動は複数の切り口による類型化が可能であり、プロセスによる類型では遊びのきっかけをつくる、遊びの継続を助ける、遊びの変化・発展を助ける、の三つに類型化された。考察の結果、保育の環境構成と展開には、個々の子どもの把握と理解、場を構成する知識と技術、玩具・教具等に関する知識と技術、総合的に捉え柔軟に実践する力が必要であると結論づけた。

生活場面における環境構成技術の抽出は、4園を対象としたヒアリングと観察調査による。インタビューと観察によって得られた質的データに、「子どもの情緒の安定を支える環境にはどのような環境構成があるか」という問いを持ち、データに定性コードを付与した結果、以下の7点に集約された。子どもの自己活動を充足する、子どもが自ら生活できる、刺激の質と量を考慮する、恒常性を保つ、自然を取り込む、一人になれる空間がある、時間のゆとりがある、環境構成で考慮する要素は、自発性、自立、個別性、刺激量、恒常性、自然、時間、空間にまとめられた。

生活場面からは以下の環境構成技術を抽出した。

第一に空間を構成する技術である。子どもの自己活動を充足させることができる空間・安心しくつろいだ気持ちになれる空間・子どもが主体的に生活できる空間・個が確保される空間・恒常的な空間を構成する、視覚刺激・聴覚刺激の質と量の適切な提供ができるなど複数のねらいを達成する技術である。

第二に、乳幼児の発達に適した生活用品を選択し、それを目の前の子どもの発達段階に応じて体系的に提供を行うことができる技術、個別の用品の色や形、美しさなどを考え選択する技術である。その前提には、乳幼児の認知の特徴、発達段階の理解と、クラスの個々の子どもを把握する技術が必要であった。

第三に日課を展開する技術である。個々の子どもの生活時間を把握し、クラス全体として時間をマネジメントし、子どもの状態と活動の内容を踏まえて予測をもって個別に対応していた。

第四に自らを人的環境として活用する技術である。保育者は自分自身を人的環境として、自らの声の大きさ、動きなどのコントロールを行っていた。

(2) 環境構成技術の構造的な把握

二つの研究結果を考察し再構成した結果、環境構成の技術は以下のように構造化することができる。

保育者に必要な環境構成技術は、生活の用品や玩具等子どもが用いる物を選択する技術、空間を構成する技術、日課を展開する技術、自らを人的環境として活用する技術の4つである。

環境構成を行うために必要な知識として、保育の展開過程とそのプロセスにおける環

環境構成の位置付けの理解、環境の要素の理解、環境構成の原理の理解、遊び・生活の環境構成の理解、玩具や用品等の選択基準の理解の5つの知識に整理することができる。

環境構成は、保育の展開過程のプロセスの一つに位置づけられる。保育者は、対象を把握し、ねらいを設定し、ねらいに沿った遊びや生活等、子どもの活動を想定し、個々の子どもの経験を助ける環境を構成し、必要な直接的な援助を行い、状況を把握しながら随時環境の再構成を行っている。(図1)

保育の理論では環境を人的環境と物的環境に分け、保育者が行う行為をすべて人的環境に入れる場合も多い。展開過程図では、保育者が行う行為を環境構成と指導・援助とに分けている。前者は保育者の服装、表情、言葉づかい、ふるまい等の間接的な行動であり、直接的な援助や指導を除くものをすべて含む。後者は子どもに対する直接的な指導や援助である⁽⁴⁾。たとえば、保育者が子どもの遊びへの集中を妨げないために意図的に中間色の服を選ぶことは前者に含み、子どもの活動のプロセスで「どうすればよいのだろう」と問いかけることや、危険な行動を制止すること等は後者に含まれる。人的環境における環境構成と援助・指導を実践のなかで厳密に分離することは困難ではあるが、研究プロセスでは物的な環境構成を行っている保育者は、環境構成の一部としての保育者を意識し、自らを環境として活用していたことが把握されたため、保育者が視点を持つことを助けるためには環境構成の一部としての保育者と直接的な指導・援助を分けて示すことが有効であると考えた。

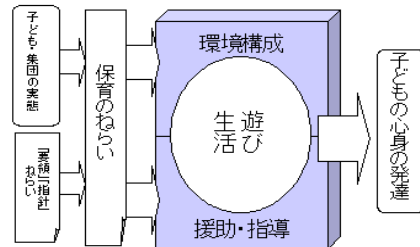


図1 保育の展開過程

保育者は、ねらいを具体的な活動に展開することを支援しているが、その際、個々の子どもの経験を想定して遊びと生活等の活動を考え、その遊びや生活が実現するための環境構成や指導援助を実施している。そのプロセスには判断が多く伴う。環境構成を行うためには対象を把握する、ねらいを設定する、個別の経験を想定する、ねらいに沿った遊びと活動等を想定する技術の習得が必要となる。

環境の要素には、自然、物、人、情報(音・視覚刺激等) 動線、空間、時間があり、保育者はこれらの要素を考慮して場を構成する。保育者には、保育室や園庭、公園などある場からこれらを要素的に把握できることが必要となり、保育室ではこれらを意識的に構成することが必要となる。しかしそれらをクラス集団に対して、どのような質と量を準備するかには、根拠が必要となる。根拠がない場合には保育者は自らの主観で音楽を流し続けたり、自らの都合で判断し片付けやすいように保育室に玩具を置かないことが推測される。これらの環境の要素を保育室に準備するためには根拠が必要である。上記

の要素が子どもに対してどのような影響を与えているかを検討した研究は限られている。高山（2011）は環境心理学や感性工学の子どもに対する研究を概観し、今後保育者の養成でこれらの知見や認知心理学の知見を活用する必要性を示している。

保育者が、環境を構成する際に判断の根拠とする原則は、保育の原理と同様であり、自発性を保障する、個々の発達段階に合わせる、活動（生活・遊び）を保障する、社会に適合する内容の選択を行うである。保育の内容と方法は、対象・目標との整合性が必要であるが、それは環境構成においても変わらない。

遊びの環境構成では、応答性が高く繰り返しが可能で十分に活動欲求が充足でき挑戦できる環境が必要である。生活場面の環境構成では、恒常性を高く保ち、子どもの安定と生活スキルの定着を重視する環境を構成する。生活場面は食事・排泄・着脱等それぞれの場面ごとの環境構成の知識が必要である。子どもの発達支援を目的とした環境構成と、情緒の安定を目的とした環境構成は矛盾するため、保育者にはそれらを調整しながら環境を構成することが求められる。保育者の環境構成技術は、子どもと集団と状況に合わせて複層的な判断を必要とする技術といえる。

（3）試行的な研修に基づく環境構成の下位知識と技術

上記で構造化された知識と技術を活用して、「根拠に基づいて環境を構成すること」を学習目標として、3つの団体において試行的に研修を行った。事前に調査研究を目的とすることを説明して研修を実施し、終了後「研修でわかったこと」の記入を依頼した。保育者の記述内容を文脈を重視し分節化せずにセグメントを作成した。結果3回の研修で177の調査票が得られ、そこから285のセグメントが抽出された。

内容の類似性により類型化を行った結果以下の6つに類型化された。根拠に基づく環境構成、環境構成の意義、専門職としての意識の重要性、子どもを取り巻く文化の現状と課題、具体的な環境構成の方法、遊びの意義である。

これらの階層を検討した結果、根拠に基づく環境構成が上位の知識であり、それ以外は下位の知識と捉えられた。（図2）次に先行研

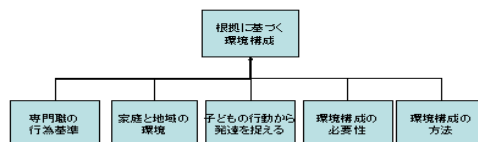


図2 保育者の記述内容による学習階層

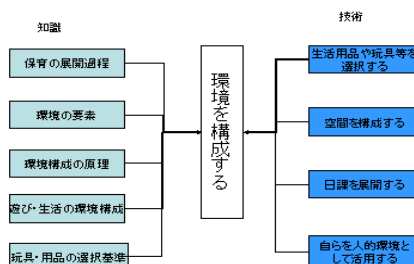


図3 先行研究の課題分析

究の環境構成の知識と技術を学習構造図として作成した。(図3)

続いて手続き型の課題分析課題を行い、環境構成を行うために実行するステップを分離した図を作成した。作成はある空間を保育室とする場合を仮定し報告者が自身の判断行為に基づいて記述し再構成は除外した。ひし形が判断を指し、四角形は行為を指す。ここでは14のプロセスがあった。(図4)

これらの結果を総合的に考察した結果、根拠に基づく環境構成の下位には子どもの行動から発達等を捉える、玩具や生活用品等を選択する、空間を構成する、自らを人的環境として活用する、日課を展開する技術があり、その前提知識として専門職の行為基準、保育の目標・方法原理、乳幼児の発達過程、発達環境としての家庭と地域、環境の要素とその影響、玩具・用品、乳幼児の遊びと生活、集団保育の知識があった。

本研究では、遊びの場面、生活の場面のそれぞれで保育者へのインタビューと観察より得たデータを構造化し、それらを総合して理論を構築し、その学習成果等から更に理論を精緻化した。その結果、環境構成の下位構造は図5のように構造化することができた⁽⁵⁾。

4. 考察

(1) 保育者の技術の獲得と前提知識

研究の結果、環境構成の技術には前提となる専門知識と技術が多く、複雑な学習階層をもつことが明らかとなった。これに対し、色画用紙の壁面製作は幼稚園や保育所で多く行われており環境構成と呼ばれることもあるが、前提となる専門的な知識も技術も不要である。同様に小学校の教室と同様の保育室の環境や、運動場と同様の園庭環境も前提となる知識と技術が不要である。これらは前提となる知識や技術が不要であるために誰もが教授しやすく模倣しやすいため普及が進むものと考えられる。実際に保育雑誌に掲載されている壁面制作は、保育の専門知識を保持しないデザイナーが作成しているものもある。

保育に関する専門的な知識と技術が不要であるという点では、壁面製作の他にも手遊び、

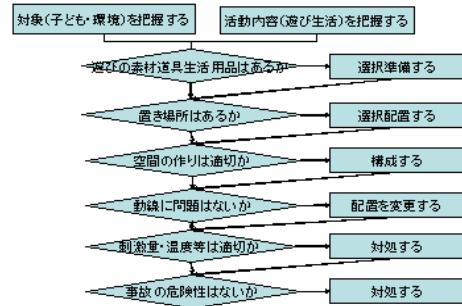


図4 手続き型の課題分析

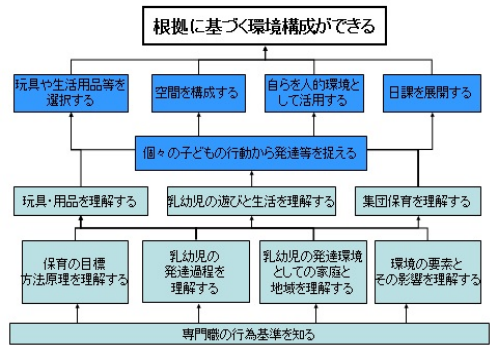


図5 環境構成技術の学習階層 Ver2

パネルシアター、エプロンシアター等も同様といえる。これらは保育者の技術として示される場合もあるが、これらのスキルは、保育の目標と原理、子どもの発達理解等の知識が不要であり、対象となる子どもの把握も活動の想定も必要ない。そのため専門知識と技術がなくても作成と実施が可能であり簡便に教授することができる。

これに対し、前提の専門知識が多い技術は、教授する側に前提となる知識と技術が必要であり、獲得する側にも前提知識と技術の獲得が必要である。環境構成技術は、前提知識と技術が多いため養成と研修には時間がかかり、その獲得は容易ではないと考えられる。

本研究では、環境構成の技術を理論化しその学習構造を分析することで、これまで保育者の技術として同様に語られてきた「壁面製作」と「環境構成」の差異を明らかにすることができた。また現在保育者の「技術」と呼ばれている行為には、前提となる保育の専門知識が必要であり「技術」と呼ぶにふさわしいものと、専門知識を必要としないものがあることを明らかにした。

(2) 技術・知識の矛盾と統合

研究の過程において保育者が行う「教育として環境構成を行う技術」と「養護として行う環境構成の技術」を理論として統合することには困難を極めた。それは、教育を目的とする技術と情緒の安定を促す技術はときに相反しており、生命の保持のために行う技術もまたその内部での矛盾を抱えているからである。

乳児や入園したばかりの子どもや、家庭の状態により情緒が不安定な場合には、安定感の高い環境を構成することが必要である。しかし子どもが安定している状況では、適度な負荷をかけることで子どもの発達は促進される。子どもの情緒の安定と、発達のために必要な負荷は矛盾する。保育者は、子どもがわかりやすく不安なく行動できる環境と、子どもが不安や負担感を感じる環境との両方を理解した上で、その子どもの状態に合わせて、環境の状態を変化させていく柔軟性が必要となる。

また保育者は子どもの家庭や地域での経験をふまえ、園での経験を組織する必要がある。もしも子どもの家庭での暮らしが暴力や不潔な環境に取り囲まれている場合には、園ではあたたかく清潔な環境で過ごす経験が必要である。地域環境が人工的な景色が広がっている場合には、園は自然にあふれ感性を育てる環境が必要であるだろう。保育者は、情緒の安定と葛藤、心地よい刺激とストレスのバランスを図りながら、集団と個のほどよい状態を探し、空間と時間のマネジメントを行うことが必要である。

養護の環境構成では、清潔で安全な環境と、適度にばい菌が存在する環境や危険な環境を保育者は準備しており、それらは矛盾している。子どもが免疫を獲得するためには雑菌や病原菌が必要である。保育では、子どもに自らを清潔にする習慣も、不潔な環境で生き抜く強さも、どちらも獲得させることが望ましい。危険を完全に排除した環境も、危険だらけの環境も乳幼児の成長発達には不適切な環境である。

このように保育者が行う環境構成には、理想的な環境はなく、保育者は常に子どもと状況に合わせて環境を構成することが必要となる。そのため、このような環境構成がよい、あるいはこの玩具がよい、このような保育室が望ましいと具体的な事例を教える方法では的確な判断を行うことが難しい。保育者が行う環境構成は、子どもと状況に柔軟に対応する性質を持つために、原則的な知識でないと応用が困難になりやすい。保育者は、対象や条件が変化しても応用が可能な原則を獲得する必要性が高い。

本研究では、どのような状態であっても判断が可能になるための原則的な知識と技術の構造化を行った。人間は背骨があることによって自在な動きができるように、実践者は原則を持つことにより、多様な保育現場に合わせて柔軟な実践を行うことができるだろう。また理論的な原則を持った保育者は、保育雑誌やテレビから得る情報、さまざまな保育メソッドを、教条主義的に受け入れることを思い留め、原則に即して必要な部分を取捨選択することが可能となると考えられる。

(3) 養成課程において原則を獲得するために必要な経験

教授の方法としては、学習階層の下位構造となる知識から最終的な学習目標に向かい螺旋型の学習活動を組むことが考えられる。(図6) 2011年より3園で異なる研修を行い、その定着の度合いの調査を続けているところであるが、上位の表面的な技術の研修を行った園よりも螺旋型で行った園では保育者が根拠を言葉で説明する度合いが高い。これについては今後別稿で報告する予定である。

教授の方法としては、要素の中でもとくに玩具や用品等の理解については、実物をさわってそれらの比較を行い、選択基準に基づいて選択する学習が必要である。保育者は現場に出ると膨大な玩具や用品から選択が求められる。しかし保育実習期間や現場に出てからでは、保育環境の比較と原則的な理論の獲得は困難になりやすい。そのため養成期間の間に、玩具と用品の理解の学習を行う必要性が高い。また、空間構成の技術と、環境構成の要素である刺激の質・量、動線等の知識を理解するためには保育室を使った体験的な学習が必要である。環境構成技術を体系的に獲得するためには養成機関には、これらの要素を比較学習できる保育実習室のような施設が不可欠になる。

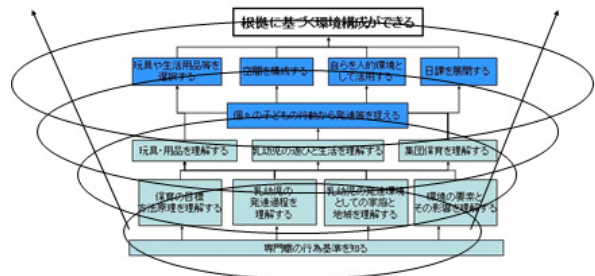


図6 学習階層の研修・養成への応用例

保育の質は、『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』を、遊びや生活、環境の構成に展

開する過程において差異が生じる。どのような活動を行いどのような環境を構成するか、その選択は保育者に任せられている。保育者が、根拠とする専門的な知識を保持しない場合には、個人的な好みにより保育内容を選択することや、子どもが喜ぶことを優先し、保育雑誌・テレビ番組の内容等を選択の根拠にする可能性が高まる。また、養成校で色画用紙の壁面製作を環境構成として教授している場合には、保育者は環境構成技術を獲得することが困難となる。保育の質を確保するためには、養成期間の間に環境構成技術を着実に教授し獲得させる必要性がある。

5. 研究の限界と今後の課題

本研究では、3年間の研究に基づいて環境構成技術を養成するために必要な知識の構造を検討した。今後、データの集積と分析により新しい技術や知識を加え、更に修正を重ねる必要性がある。今後、研究結果に基づいて螺旋型の研修の実施を継続し研修評価を繰り返すことにより構造の妥当性を高めていく予定である。

日本における保育者養成は、幼稚園や保育所で実践を重ねながら体験的に技術を獲得する段階にあり、養成教育で体系化された技術を教授する段階には至っていない。保育者が専門職足り得るには、専門知識に基づいた判断を行うことが必要であり、養成における知識と技術の体系的な教授が不可欠といえる。

保育研究では、保育実践から理論を構築するために質的研究の手法を用いることは始まったばかりである。今後、実践を構造化する研究が増えることにより保育者が保有する知識と技術が明らかとなり、それらを体系的に養成課程で教授することが可能となるであろう。

付記

本研究は、第50回全国保育士養成協議会研究発表大会で発表した「保育における環境構成技術の構造的な把握と養成の課題」(高山静子,全国保育士養成協議会研究発表論集,全国保育士養成協議会,2011,pp.32-33.)と、第65回日本保育学会大会で発表した「コンピテンシーリストを用いた保育者研修プログラムの開発 根拠に基づいた環境を構成する技術の獲得」(高山静子,日本保育学会,2012)に再度考察を加え再構成したものです。本研究の趣旨に賛同いただき、研究に御協力を賜りました諸先生方及び日本保育学会で貴重なご意見を賜りました先生方に心より感謝申し上げます。

注

- (1) 厚生労働省『保育士養成課程の改訂について(中間まとめ)』(平成22年3月)
- (2) 平成21年度 児童関連サービス調査研究等事業報告書,高山静子,今井豊彦,名倉一美,高辻千恵,田甫綾野,茂井万里絵,三谷大紀『保育所における教育的機能に関わる実証的考察とその活用に関する研究』こども未来財団,2010.
平成22年度児童関連サービス調査研究等事業報告書,高山静子,今井豊彦,圓藤弘典,岩井久美子『保育

所における養護技術の抽出と活用に関する研究』こども未来財団,2011。(いずれも研究代表者は高山静子)

- (3) 高山静子「保護者支援の環境構成技術」柏女霊峰・橋本真紀編『保育相談支援』ミネルヴァ書房,2010,pp.68-84.
- (4) この構造化のプロセスは以下の報告書をご覧ください。平成21年度 児童関連サービス調査研究等事業報告書,高山静子,今井豊彦,名倉一美,高辻千恵,田甫綾野,茂井万里絵,三谷大紀『保育所における教育的機能に関わる実証的考察とその活用に関する研究』こども未来財団,2010.
- (5) 第65回日本保育学会大会で発表した「コンピテンシーリストを用いた保育者研修プログラムの開発根拠に基づいた環境を構成する技術の獲得」では Ver.1 を発表し議論を踏まえて改訂を行った。

引用文献

今井和子『012歳児の心の育ちと保育』小学館,1998.

塩見優子,立石あつ子「幼稚園・保育園における遊び,遊具の配置、動線に関する研究」『保育学研究』第40巻第2号,2002,pp.81-89.

高山静子,今井豊彦,圓藤弘典,岩井久美子,児童関連サービス調査研究等事業報告書『保育所における養護技術の抽出と活用に関する研究』こども未来財団,2011

刊マハムら,埋橋玲子訳『保育環境スケール乳児版』法律文化社,2004.

刊マハムら,埋橋玲子訳『保育環境スケール幼児版』法律文化社,2008.

藤井伊津子、高月教恵「乳幼児の自然環境について(1)」『順正短期大学研究紀要』(32)2003,p.47-57.

槇英子「幼児の表現活動を支援する保育環境の構成」『保育学研究』第36巻第2号1998,pp.148-156.

R.M.ガニエ,W.W.カイザー,K.C.ゴラス,J.M.ケラー『インストラクショナルデザインの原理』北大路書房,2007.

吉本和子『乳児保育』エイデル研究所,2002.

吉本和子『幼児保育』エイデル研究所,2003.